



朝の眼、夜の眼

針の先よりも小さな雫が無数に寄り集まって、台所の硝子窓を青白く曇らせている。明けの明星を見送った銀色の蛇口は、朝陽を受けてその曲面をひときわ白く輝かせる。ずっと前からそこにいたのか、今やってきたのに気づかなかったただけなのか、顔を上げるといつもあの子がお私を見つめている。おはよう。

ふと思い立ち裏山をのぼる。昨日は見かけなかった木の実が道の上にくっつか。落とし主を想いながら歩くうちに日は翳り、いつしか私は目当てを見失っていた。世界にただひとりとなって涙を流す私の上で、黒い影が月の光を横切る。木から木へと渡るそれを目で追いかけるうちに、谷を灯す明かりが見えてきた。助かった。私が森を見るとき、森も私を見ている。あの頃よりもずっと明るくなり、寂しさが薄らいだ今でも、静かな眼差しと気配は森のあちらこちらに息づいている。